三河アララギ

２０２４年 令和６年１月 睦月（むつき）

新　年　号

第 七十一 巻　第 一 号

ニューヨーク日記（207）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

THE KYOTO EXPERIENCE
Blue Shoe Diaries

京都は日本人であっても何時も何か特別な感じがしない？ 今回の京都はその上貴重な体験付きでした！ 祇園一のお茶屋さんで舞妓さんや芸妓さんとお喋りしたどすよ～舞観賞も素敵～本当の京都の世界を少し見せてもらいました。もちろん美味しい京都も！ 京都、祇園は特に、行くと夢でタイムスリップしたかのような気になって次の朝起きる感じがするなぁ。

Visiting Kyoto is always special, even for Japanese people. This time around it was extra special because we got to experience an evening at the most prestigious tea house! Seeing the maiko-sans and geiko-sans' dance performance, chatting with them over sake, and even enjoying a meal at a classic Kyoto restaurant. It was all surreal as you feel like you're transported in time and place that when you wake up the next morning, you're not sure if it was all a dream.

目次

第七十一巻第一号（通巻八四一号）

表紙・富士山（1）
ニューヨーク日記(207)　Blue Shoe（2）
歌集　わが冬葵　御津　磯夫（4）
歌集「草々」　今泉　米子（5）
三河アララギ歌集Ⅴ　大須賀寿恵（6）
三河アララギ歌集Ⅴ　夏目　勝弘（7）
『歌集　八千代』　岡本八千代（8）
三河アララギ歌集Ⅴ　弓谷　久子（10）
地球にて　今泉　由利（12）
霜月　安藤　和代（14）
金山寺味噌　山口千惠子（16）
イタリアへ　杉浦恵美子（18）
旅の空　伊藤　忠男（20）
誕生月　白井　信昭（22）
ステップアップ　矢崎　直人（24）
『ことよせ』　いーはとぶ
牧原　規惠（26）
稲吉　友江（26）
鈴木美耶子（27）
伊藤　晴江（27）
牧原　正枝（28）
森　厚子（28）
水野　絹子（29）
大武　智子（29）
現代学生百人一首　東洋大学
小塚　萌愛（30）
高橋　永尚（30）
井上　璃音（30）
松橋　明句（30）
樋口壱之介（31）
宇佐見　翔（31）
北湯口莉奈（31）
岡本　春紀（31）
植村　公女（32）
木村　歩歩（32）
今泉　如雲（32）
矢崎　直人（33）
今泉　由利（33）
川口カルチャー受講者自作自詠俳句集（34）
五感を澄ませば(19)　杉浦恵美子（36）
附録（十九）　矢崎　直人（38）
『今年もまた　今年こそは』
中屋　保之（40）
『酔いの徒然』（141）　丸山酔宵子（42）
「こころ　コロコロ」　高橋　育郎（44）
絹の話（158）　今泉　雅勝（46）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（48）
初狩便り26　花野みぶり（50）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
本田　勇気（52）
康鍼治療院　玄　翁（54）
『打球の二麗人を吟ず』　殿山　木風（56）
編集室だより　今泉　由利（58）
「三河アララギ」について（60）

歌集　わが冬葵

御津磯夫

ひとたび支柱あつればみづからに保つ力のなき枝となる

薄明のはやき朝々うつうつとことわりもなし老いの眼覺めは

生きのこる幾ばくありとも老いぬればわれはまだ讀まず地球終末論を

夕茜の餘光の空に向かはしむ視力おどらぬ子をはげまして

缺刻なき細長き葉のやはらかしこれぞ在來種東海たんぽぽ

筍の正しきすがたに立ち揃ひみづから黒し黒竹の子は

五基ありて石燈籠の見えぬまで茂り繁れるわが庭を愛す

踏み込みてびんばふかづら引かむにも露の草深し長靴を穿く

手さぐりに子が渚より拾ひあげし貝殻白しかさねられつつ

五位鷺のゆく月細き空を見て四日かといへば六日なりといふ

歌集「草々」

今泉米子

はつはつに期日に出だす明細書馴るることなし幾年にして

引馬野を歩み見たまひしよろこびの書簡いただきてより二十七年

わが夫の考證にうなづきたまひつつ涌井の水にしばし立たしき

千二百年前を標して石建ちぬ今日の港の潮澄みわたる

もみぢせる蔓まつはれる萩植ゑて友らはかこむ引馬野の碑を

石文の除幕の祝詞にうなかぶす二級國道のとどろきの中

除幕すみしみ庭の白き砂を踏む齋(いつ)きて萩を植ゑし友らと

父の忌に母の忌を合せ營みて秋あたたかき一日暮れゆく

暗くなりし石段くだる後より呼びてわが掌に匂ふ椎茸

いつしかに月押し照れりノボタンの苗をもらひて歸りゆきたり

三河アララギ歌集Ⅴ

大須賀寿恵

蒼く澄みて透れる今朝の大空を翔びゆくもののなきはよろしも

緑どりてきらきらと今朝の霜白しほとけのざまたはこべらの上

今日一日おだやかならむと思ひつつ一人歩めり霜厚き朝

さわがしきまでに囀る声のしてきさらぎ雲雀は枯草の中

何といふことあらねども夕べ早く飯を終へつつ心足りゐる

松の緑すくすく伸び立つ春の日の今日より成は中学一年生

またひとつ殖えたる右手の老斑に沁々としてクリームを塗る

疼痛に耐へて生きゆくも意義ありと悲しみながらのこの三十年

一人静の花にかがみて相共に心の内は言ひ出さずをり

移り棲みて十三年なり東を西をいまだあやまつわが日々にして

三河アララギ歌集Ⅴ

夏目勝弘

左眼の飛蚊に長き尾の出たりハレー接近に係はりありや

かつて我もしてもらひし同じごとく男と女を見合ひさせをり

見合ひさせて帰りきたりぬ暫くを横たはり寝てただただねたり

煩はしと思ひし見合ひを今日我は上座に坐りて仲立ちをする

目覚時計また睡眠薬等々は我の一生に不要なるもの

手を伸ばせば逃げゆく目覚時計ありといふ我に出来ざる発明なり

眼閉づれば忽ち眠れる単純の出来ざる人を憐れみにけり

明日があるといへる言葉の虚しさを重き布団に丸まりて思ふ

短歌など作るはナクラと貶すあり秋の日の空の碧さを知るや

細き枝に止まれる鳥は只管に安定の動作繰り返しをり

『歌集　八千代』

蒲郡　岡本八千代

虫鳴ける今宵よりまた日記書き家計簿も細かくつけたくなりぬ

蜂に刺されし生徒にぬりしアンモニアのわが指に匂ふまま授業する

シュバイツァー博士逝きしを話して一時限の国語の授業始めむとする

陶芸家になるといふ君の手造りの風鈴を厨の軒に吊りたり

金太郎さの大松昔はわが松と祖父より聞かされ三十年経つ

うす紫の靄だつ山の上の学校にひとり日直の交替を待つ

弱くなりて留守を頼めるわが母に祭りの熱き焼栗を買ふ

今朝つきたる赤き寒椿は体育館のトベラに続けて植ゑられてゆく

バスケットリングをつたふ秋雨の雫の列を吾はみてゐる

潮の嵐に南庭に並ぶポプラの葉今年の秋は赤錆びて散る

中間テスト国語問題つくりゐて今日の日直の過ぎてしまひぬ

「陀兜囉の会」終へて信光寺の門を出づ夜の時雨のいよよ降る道

兎島猿島近くみゆる沖に赤貝漁りの船四十八隻

知柄浜より出でゆく船のエンヂンの響きはつたふわが教室に

二つめのアフガン編み毛布つくらむとわがセーターも解きてしまひぬ

三河アララギ歌集Ⅴ

豊川　弓谷久子

杖を突く夫つまづけば支へゐる我さへ共によろめくものを

手を借さず我は見てをりシャツの釦夫が片手にて掛け終る迄

汗しとどに立ちゐる夫の手を執りて歩かせて見む五六歩にても

晴れ渡り風静かなり病む夫を幾日ぶりぞ入浴させむ

風呂あがりの夫の体より柚子の香のかすかに漂ふ冬至のこの夜

鰻など買はむと師走の町に出づ夫が戴きたる義援金持ちて

握り飯とポットを枕辺に並べ置く暫しの留守を夫に言ひつつ

我が留守にひとり立ちして転びしと夫は幼子の如くに言ひぬ

病み永き夫と暮してひとりごと言ふ癖いつしか我に付きたり

病む夫と暮してひとりごと言ふ癖いつしか我に付きたり

病む夫のかたへにありてまた一年過ぎしを思ふ除夜の鐘鳴る

幼さに戻りし夫に言へぬ愚痴一人ごちつつ鏡餅割る

赤十字より今年も夫に寝巻の届く白地に紺の柄の匂ひて

眠り浅き幾夜続きぬ常臥の夫を思ひ嫁ぐ子を思ふ

病む夫を姉に頼みて今日だけは花嫁衣裳の子に付き添はむ

地球にて

東京　今泉由利

さりげなくおとなしくしてゐる日々あのことこのこと気付きはじむ

自らの判断をするその日まで母の限りを共有しよう

自らを自ら守る自分の心やさしくあれ安全にあれ

私の知らないことに向かひゆく我子等が居て地球いとしい

自の居る環境に適応し静かに静かに静かに居ます

私と同じ心が三つあるそれぞれ何処にありてもいとしい

歩き始めの幼子二人私の後に続くフロリダ半島ケネディ宇宙センター

雲に入る海を見下ろす長き長き飛行中の時をまた過しをり

地球儀を見ているような地球儀をくるくる回しているような

どうしても縫いぐるみのプーを離さない二才の玉由プーさんの足となる

真地球を幾十回も回りしことよアルゼンチン日本四万キロの航空券

飛行機に乗る度〝死〟を思ひしをこのごろやっと諦めを知る

日本へ米国へアルゼンチンへヨーロッパへアジアへただ一つある太陽のもと

朝の陽は私の部屋の入り来る今日は東京の日光浴

想い出の一つ一つに入り込みいつも楽しいいつも幸せ

霜月

豊川　安藤和代

霜月の十一日は鮭の日とつくり分解十一十一

雨上り朝の空にひよどりの啼き合いており吾れも友恋う

木々の間を細く編まれし蜘蛛の糸露に輝く静かなる朝

風にのり大きく小さく流れくる学舎からの朝礼の声

衣食住事欠く戦後を生きたれば今世に何の不満あろうぞ

なぜか今日飲む薬をば忘れたり枯葉カラカラ軒下を舞う

「図書館でアララギ読んだ」と友からのラインに心ほのぼのとして

在りし日の夫と求めし風鈴の忘られし窓に「チロロン」と鳴る

姉妹か雀の二羽が離れては又近づきてお隣りの屋根

フライパンも鍋も重たくなる腕にかけ声かけてチャーハン作る

若き日の歌友なつかし電話あり嬉しき庭はコスモス揺るる

認知予防カレーがいいと知りてより嫌いが好きとなりて半年

数独の解けてひと日は晴ればれと夕餉の南瓜真ふたつに割る

母の衣をときて作りしチャンチャンコ着るは嬉しき冬がまた来る

古毛糸編みている灯に小さき蛾の冷え来し夜を心遊ばす

金山寺味噌

豊川　山口千惠子

午後五時を告ぐるチャイムの鳴り渡る日ごとに早し日暮れの時間

蘖の青く伸びたる田の中に稲架の立ちをり秋の日の中

一面の刈田の中に稲架一列秋の日あまねし風のなき午後

黒々と刈田にうごめく鴉の群黒きかたまり見て通り過ぐ

スーパーの自動音声にみちびかれ精算機の前にとまどひてをり

公園のブランコに夫と座りつつ白雲浮かぶ空見上ぐ

スーパーに買ひ来し麦の糀にて作りてみむよ金山寺味噌

作り方見つつ仕込みし金山寺味噌祖母思ふ祖母なつかし

音羽川流れの中の石の上じっと佇む青鷺一羽

庭先に飛び交う黄色の蝶二つ付かず離れずたかく低く

はなやかな花はいつしか治まりて黒きトゲトゲコスモスの種

朝よりパワーショベルの音響かせ無人の隣家とりこはされゆく

砕石を敷きて広々家の跡交はりありし人を思へり

石蕗の黄色の花咲き乱れ師走も間近かと今年も思ふ

玄関を出でしわれと目の合ひてきびすを返し逃げてゆくこの猫

イタリアへ

蒲郡　杉浦恵美子

パスポート更新してより四年経つ未だ真っ新一寸淋しい

パスポート何の為なのそれは旅しないのならば意味なき手帳

何処へ行くやはりわたしはボローニャが一番行きたい二つの斜塔

秋夜長ＰＣ画面に探せるは格安チケットイタリアへの旅

ポチッひとつ我が商談は成立すイタリアへの旅既に始まる

後戻り出来ないけれどコロナ禍の四年の空白押し寄す不安

運べるかトランク空でもこんなにも重かったかな四年の空白

いざ行くとなればトランク中の荷を入れたり抜いたり日課となりぬ

やはり無理お土産幾つか取り出して差し上げ先を厳選し始む

トマトジュース一杯飲むのが験担ぎ我がひとり旅無事にてあれかし

何もないすることもない六時間もトランジットの北京空港

略一日掛かってボローニャ駅前に立てば四年の空白は消ゆ

ああ遂に此処まで来たぞ石畳歩き難いが問題じゃない

道端の蜜柑求めて車内には晩秋甘き香忽ち満てり

道端に売らるる蜜柑のひと山を土産に美濃加茂柿買ひに行く

旅の空

大阪　伊藤忠男

山隔て晴れと曇りの裏表人の心を写し取りたか

夜ひとよ過ぎれば野山雪化粧心も凍る寒きこの朝

新潟に雪を覚悟し降り立つも雨まばらにて拍子抜けする

寝つかれぬ旅の枕によるものか明日の会議が気がかりなるや

高崎で見える山並みさらなるや富士に負けじと翼広げる

「とき」に乗る初めてなりや北紀行広き車内に目をみはるなり

温暖で水も豊かなここ駿府絶景ありて風雪は無し

太陽にかかる日暈は寂しそうここは恨めし三保の松原

いつ見ても流れるうなじ色気ありやはり富士山憧れの山

名古屋との声聞き車窓変わりたりビルの谷間に人・人に人

黒雲の垂れたる下をすぎたなら一息つける晩秋の空

朝凪かすぐ手の届く黒雲の動き止まりて漂いにけり

白々と東の空が明けていく稜線クッキリ見える頃なり

宇宙より一度は見たいこの地球我等はなんと小さきことか

我の旅登り至りて九合目見える頂きなお険しなり

誕生月

豊川　白井信昭

カーポート落葉はきゆく日日にして庭中に拾う落穂の幾つ

垣根なすわがモッコウバラに群雀囀(さえず)りあう声一時騒がし

生垣の土留補強に解体の単管パイプ生かして使う

単管にコンクリート練り込みて鉄筋棒使う試みにあり

一群の黄菊に続き生垣に白菊一株今を盛りと

今年の淡暑酷暑猛暑もたらしし気象ようやく崩れて秋は動きぬ

保護メガネ失ないしものと思いきや小屋にゐでたりわが誕生日

北隅の花壇吹き荒ぶ中ようやくに振動ドリルに単管はがせり

生垣の土留支柱管十四本コンクリート詰め終えにけり

予約日の特定検診五項目はかどり終えてわれ待合に

麻酔切れ腹痛ありつつ診察に医師は画像に「異常はなし」と

一本のわがモッコウバラ垣根覆い生垣車庫に撓み撓める

モッコウの枝先ひっ張り生垣のシマヒイラギにひっ掛け絡ます

未開通の蒲郡バイパス二区間接続工事いよよ始まる

朝よりはＲ２３一般道予想だにせず渋滞をゆく

ステップアップ

埼玉　矢崎直人

白鷺の見沼用水悠然とここは我が川言わんばかりに

見る人のそれぞれの顔気根かな妖精の顔観音の顔

次々と読み換えていく本の壁積んでは読んで読んでは積んで

秋の空ステップアップの一歩かな振り返りみて踏んでく一歩

バスを待つ時間の星に吹ける風久しく一人感じる時間

炊き出しの訓練冬の施設にて消火訓練水を撒いたる

冬青空遠望の富士ぼんやりと霞んで遠く浮かんでみえる

味噌を付け鮭のチャンチャン焼き喰へるクマより旨い鮭を喰いたる

岩槻の駅から見ゆる富士の山線路の富士に向かってのびる

限界と可能性との冬青空雲一つなく浮かべる富士の

新宿の迷宮めける駅の中工事で地上に出るのに迷う

スーパーの天井のある駐車場しぐれて天井下の混み合い

穂芒の揺れてる風景いつかみた夢の続きの中の風景

朝露の学校横の川の道運動会のアナウンス聞く

延期さる入職式に着る背広袖を通して確かめてみる

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

お祝ひのケーキを作ると孫の一人われ最良の誕生日なり

牧原規惠

わが畑の作物の名を教へむと日除け帽子を孫に譲りて
星なのか一際きらめく光あり否飛行機かわれ見上げたる

稲吉友江

なかなかに短歌の出来ぬこのところ今宵は夫が「出来たか」と聞く
孫子等が見舞ひてくれるに母の眼に涙浮かびぬ誰か分からず
碇泊のオレンジ美し「しらせ号」三河の海を今日離れゆく

賢治のこと解き下されし八千代先生「永訣の朝」「雨ニモマケズ」と
老学生われらに賢治を語られき「八千代ノート」の分厚きを繰り
やうやくに一首となりぬ先生は何と仰さるか声に出してみる

鈴木美耶子

昼なかの電気スタンドの明るかり師と話しけり教師の仕事を
師と会ひて向きあひ初めて聞きたりきあれやこれやと教へ子のこと
師と話すうちにたしかな芯の強さ感じてをりしひしひしと我

伊藤晴江

日当たりに少し日陰にと植ゑ置きし畑に庭に藤袴ゆらぐ
あれほどの暑さ続きしに丈高く香り放ちて藤袴咲き来
あちこちに一株ごとの藤袴アサギマダラよ来よ西浦へ

牧原正枝

宿の朝寝覚めの床に風にのり甘くかほり来キンモクセイか
金木犀のかほり忍ばす秋の風誘はれるまま花よいづくに
雨落つる八角堂の露天風呂ゆるりと眺むほつほつの雨

森厚子

丸顔のあんたに白髪は似合はぬと母は言ふなりだけどまう私
夢を見て目覚めし夜半のしばらくは今の我こそが夢かもしれぬ
頻り鳴く虫の音哀しその影も確かめざるまま明くれば嵐

水野絹子

カラオケ喫茶の常連となりいつしらに忘年会に誘はれてをり
五線紙を見よと言はれて音楽の授業思ひだすカラオケ教室
側溝の金属製の蓋よく見ればおぞまし隙間を覆ふ濃緑

大武智子

現代学生百人一首

東洋大学

家の中授業を受ける弟の背後を通る私は忍者

専修大学附属高等学校二年　**小塚　萌愛**

祖母からの贈り物には茄子があり畑が薫る今日の夕飯

貞静学園中学校二年　**高橋　永尚**

リンリンと風鈴揺れて目を覚ます今年は行かないラジオ体操

貞静学園高等学校一年　**井上　璃音**

ぐうたらの父も外では郵便屋日焼けでわかる灼熱地獄

貞静学園高等学校二年　**松橋　明句**

アクリル板マスク消毒ディスタンス慣れたくなかったこんな生活

東京都立片倉高等学校二年　**樋口　壱之介**

蝉の音が読んだページに刻まれて参考書から八月の記憶

東京都立片倉高等学校三年　**宇佐見　翔**

寂しいな私の問いには生返事一緒にいても目線はスマホ

東京都立府中高等学校三年　**北湯口　莉奈**

コロナ禍で身近になった黒マスク対策のはずが今では親友

東京都立本所高等学校二年　**岡本　春紀**

『俳句』

老犬に歩幅あわせし冬帽子　植村公女

黄落をつききってきし笑顔かな

少年の片耳ピアス冬の虫

学び舎に語る友無し古希の秋　木村歩歩

同窓の二十余人に散る銀杏

病窓の釣る瓶落としに来世見ゆ

すすき刈り屋根葺く農家生き返り

自販機にコーンポタージュ冬立ちぬ

筑紫へと飛ぶや鯖雲下に見て　今泉如雲

四百里来て門司港に秋の潮
清張の生れし町なり松落葉

秋の暮ロマンス奏で髭の爺
秋光るゴム鉄砲の木の玩具
井の頭マスクの鷸の舞踏会
秋の声登れ登れと榎の木
秋日和花子のいない象の家

矢崎直人

赤まろし赤極まりぬ実南天
枯れ蓮折（はちす）れかさなりぬ沈みゆく
冬籠りバランスボールにゆらゆらり
持て成しは数滴絞る生姜酒

今泉由利

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

木風

光満ち既に紅葉軽井沢

秋澄めり家家家の長野かな

トンネルも秋澄む心地グリーン席

十六夜の群雲もよしあるがまま

冴えわたる月を吾が身におさめたり

雄山

三峰（みつみね）は日本（にっぽん）の神宿る山

紅葉狩り三峰の宮道険し

紅葉狩り二瀬（ふたせ）ダム越へ甲斐の国

夏の昼会社の仕事はカフェテラス

山々の紅葉が抽く裾模様
散り敷いた落葉踏みしめ帰る道
秋日和行き交う船や波光る

飯田菱泉

黄金色風に稲穂は頭下げ

紀山

海のもの山のあり今年酒
窓よりの景色の中の冬はじむ
真地球に生きゐることよ神の留守
石化せし昔トンボとにらめっこ
名月を独り占めしてひとり酒
昆布〆の鮃食べ頃新走り

今泉由利

五感を澄ませば（19）

杉浦恵美子

紅葉

最近は、異常気象のせいで11月に入っても夏日があったりして、結局秋の風情を感じる日数が少なかった気がします。私個人の感想では、秋用の服の出番がありませんでしたから。

そんなわけで、テレビの天気予報のコーナーでも最近まで、衣替えにはまだ早いとか、昼間は半袖でよいけれど夜になると冷えるから上着を忘れないようになどとアドバイスしていましたね。

ところが今度は急に寒くなり、もう冬並みの積雪があった地方も。

こんな急激な天候の変化には、身体が付いていけませんよね。

でもそのおかげで、例年以上に見事な紅葉が各地で見られるようになったようです。

さて春の花見と秋の紅葉狩りは古来日本の二大行楽です。

特に娯楽の殆どなかった昔はもちろん、現代でも春と秋の良い季節に山野へ行って遊び楽しむというのは、格別のものがありますね。

個人的には、紅葉狩りというのは、あまりにも艶やかで、そのためか逆に「滅びの美」という感じがして、花見ほどにはわざわざ見に行こうという気はしないものの、偶然出合った見事な紅葉に心奪われたことは数知れず。

つい先日も東本願寺に参拝したついでに西本願寺へもと出向いたら、御影堂前の大銀杏が真っ黄色に色づいていました。これはまさに「黄葉」の方のもみじですね。

後で調べたら「水吹き銀杏」「逆さ銀杏」とも呼ばれ、枝が縦方向でなく水平に広がっていて、それがこんもりとした黄金の小山のようで思わずカメラを向けました。

樹齢三百年のその銀杏と、東本願寺の参詣者の多さに比べてひっそりとした佇まいの境内の趣きは今も瞼にありありと浮かびます。

さて「紅葉狩り」。いかにも日本的な風情ある言葉ですね。今年は残暑が長引いて、紅葉の名所の見頃が例年よりずれて心配したからこそ、例年並みの紅葉狩りを人々が楽しめていることに安堵します。

何かの記事に「日本人のパスポート保有率が17％と低いのは、例えば76％の英国と比べて、日本では北海道から沖縄まで変化に富んだ自然があり、わざわざ海外に行

かなくても自国内ですべて調達できるから」とあって、さもありなんと納得したことでした。

そうですね。日本の豊かな自然、四季。そこから醸される文化。

今や海外からの観光客も、ＳＮＳによって日本人以上に日本のそんな魅力を知っていて、日本各地の紅葉狩りを楽しんでいるようです。しかも着物で着飾って。

またこのような恩恵が、日本独特の短歌という表現形式を生んだのではとも思います。

さて紅葉を詠んだ名歌を挙げてみましょう。

まずは安直に「小倉百人一首」から

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞くときぞ秋は悲しき
猿丸太夫

このたびは幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに
菅家

小倉山峯の紅葉葉こころあらば今ひとたびのみゆき待たなむ
貞信公

山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり
春道列樹

嵐吹く三室の山の紅葉葉は竜田の川の錦なりけり
能因法師

どれもあまり技巧的でなく素直に歌われているところに却って写し切れないほどの紅葉の素晴らしさを思わせます。

付け足しで良寛さんの辞世の句

うらをみせおもてをみせて散るもみじ

こちらはしみじみと深い。

短歌からは、私にとっては与謝野晶子のこの一首

金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に

中学校の国語の教科書にこの歌が載っていて、クラスの誰かが「ちひさき」をそのまま読んだので意味が通らず、今は亡き岡本八千代先生が、一寸揶揄った後、優しく説明してくださいました。今もこの歌を読むとその時の情景が目に浮かびます。半世紀以上も昔！

金色のちひさき鳥の銀杏葉はわが師の面影運び来るかな

附　録（十九）

矢　崎　直　人

秋の暮ロマンス奏で髭の爺

晩秋の井の頭公園を訪れました。異常気象の暑さのせいか紅葉にはまだたいぶはやく暖かな日でした。井の頭池にはかいつぶり、マガモ、鵜、カワウ、五位鷺など水鳥が沢山いました。ストライプのシャツを着た白髭のお爺さんがつがいの鳥はロマンスの最中だと言っていました。池の周りを歩き神田川の起点まで行きました。これを下ると都会の中を暗渠と地上を繰り返しながら隅田川に合流して東京湾に流れ込みます。桜紅葉が川にうつります。烏瓜が成っている家があります。

秋の声登れ登れと榎の木

文豪ならポーズを撮って写真におさまっていそうな実が沢山付いた大きな榎の木があって「登らないでください」と札が付いていました。登ってはいけないという禁止がかえって榎の木の方から登っておいで登っておいでという声が聴こえてくるような気がしました。

水生物館では、水鳥のカイツブリの赤ちゃんが糸のような白い便を出しながら水の中に潜っては浮かんでくる様子をみるこ

とができます。一生懸命足掻いている姿がかわいいです。また、イトヨやトウキョウオオサンショウウオなど貴重な生物を観察することができます。

井の頭池の畔の木の根元に気根が沢山ありました。木が空気を取り込むために根元を地上に出した瘤です。見る人によっては、妖精に見えたり、観音様に見えたり様々な表情を見せてくれます。

見る人のそれぞれの顔気根かな妖精の顔観音の顔

『今年もまた　今年こそは』

中屋保之

宝船

藤野君山

寿海波平かにして紅旭鮮かなり　遥かに看る宝字錦帆の懸るを
同乗の七福皆笑を含む　知る是れ金銀珠玉の舟

「辰年」である。字としては「龍」や「竜」があるが、干支の場合は「辰」がよい。〝たつどし〟と言うが〝りゅうどし〟とは言わない。干支とは、十干と十二支の組み合わせのことをいう。十干は、古代中国（紀元前17世紀に興った「殷」という考古学上実在が確認されている中国大陸最古の王朝）の陰陽五行説（宇宙のすべては陰・陽と、水・金・土・火・木の五つに分けられるとする思想）が起源とされる。一説によるとこの時代、太陽は10個存在しており、それらが順に日を巡らせて月日を把握しているとされた。陰陽では、この十干（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・葵）を兄弟（＝えと）に擬して、兄とするものを「え」、弟を「と」と称するようになったそうである。

これに、五行思想をその構成順『甲・乙＝木』『丙・丁＝火』『戊・己＝土』『庚・辛＝金』『壬・葵＝水』を当てはめてゆくと「甲〝き〟の兄＝きのえ、乙〝き〟の弟＝きのと」、「丙〝ひ〟の兄＝ひのえ、丁〝ひ〟の弟＝ひのと」…〝丙午の女は気が強い〟などというアレである。因みに、「甲乙丙丁簿記更新時期」が十干を覚える秘訣だとか。

古代中国では、「日」を数えるには十干、「月」を数えるには十二支を使用していたと伝わり、時代が下るにつれ「年」にも及ぶようになったとの事であるが、十二支の元々は木星の位置を示すための呼称だったようで、この星が12年で天空を一周することからこれを十二分して動物名をあてはめたとの説がある。その動物名については、さしたる根拠はなさそうである。ただ、これらの思想には、世の森羅万象、生きとし生けるものの芽吹きから成長し、やがて衰退に到るまでの過程が表されているからであろうか、やがて、暦や時間、方角など幅広い分野に適用されてゆき、飛鳥時代には日本にも伝わっていたそうである。

とにもかくにも「辰年」である。「辰」＝龍は十二支の中で唯一想像上の動物で、古来〝火除け〟の守護神として崇められている。深川が江戸の辰巳（東南）の方向にあったため、当時の深川芸者衆は「辰巳芸者」と呼ばれ「粋（いき）」の象徴ともなった。また、「辰の刻」は現代では午前八時前後、ちょうど朝のラッシュ時に該当し活気みなぎる頃に差し掛かる時間帯である。中国の古典『易経』に、「雲龍風虎（雲は龍に従い、風は虎に従う）」がある。優れた人物や英雄がその偉大さに相応しい場所や状況に現れるのだそうな。今年がそんな一年になることを願う。

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ
松ぞををしき人もかくあれ

昭和天皇　御製

『酔いの徒然』（一四一）

丸山酔宵子

『モロッコ・ドバイ・アブダビを旅して【1】』

令和5年11月14日（火）午後10時30分、成田国際空港からエミレーツ航空319便は一路ドバイへと定時に飛び立った。

一生に一度は本物の砂漠で、ラクダに乗って砂漠を闊歩し、輝く朝日を浴びてみたいとモロッコへの旅に挑戦したのである。コロナ禍、最後の海外旅行はバルセロナで、それから約3年、久々の海外旅行である。

成田を飛び立ってから、ワインとウイスキーを飲みながら映画2本、うとうとすること数時間、約12時間で、やっとペルシャ湾に面するアラブ首長国連邦の未来都市ドバイに着く。ここは終着地ではなく、トランジットで約9時間、モロッコのカサブランカへ向かったのである。モロッコとの時差は8時間で、カサブランカに着いたのは現地時間午後1時過ぎ。秋とはいえアフリカのギラギラした太陽がまともに降り注いでくる。

カサブランカと言えば、ハンフリー・ボガード、イングリッド・バーグマンの名作「カサブランカ」の舞台となった街で、名曲〝As time goes by〟の舞台となったピアノバーのリックス・バーがある。

そんなカサブランカから最初に向かったのは、モロッコの首都ラバトにある世界遺産の国王ムハンマド5世廟である。ラバトの中心の広大な高台に建てられた廟とモスクがあり、正門には白馬に乗った民族衣装に身を纏った凛々しい兵士が待ち構えている。丁度イスラムのお祈りの時間と重なり、荘厳なモスクには、コーランの声が響き渡っている。

○回廊に響くコーラン秋の暮れ
○コーランがモスクを揺らす秋の夕

酔宵子

首都ラバトを後にして、内陸部に入り約250㎞、モロッコ初日の宿泊地である青い街シャウエンに向かう。青い街と言われるシャウエンはモロッコの北部リフ山脈の奥にあるひっそりとした小高い山間にある街である。旧市街は、建物の壁や道路、階段も、すべてブルーでペ

イントされ、淡い水色から深い青まで、さまざまな青色が使い分けられている。「おとぎの国」と絶賛され、世界中から観光客が訪れる大人気スポットとなっている。

何故街全体が青色に染まっているのか・・・・・・。

夏の暑さを涼しげな青色で紛らわせるため、虫除けのため、などなど様々な説があるが、かつてスペインから追われたイスラム教徒がシャウエンに住みついたからというものが正しいようだ。。青はイスラム教にとって神聖な色で、ムスリムの誇りが建物や道路など街並みを青く染めていったと言われている。

曲がりくねった路地は迷路のようで、異次元に迷い込んだような錯覚を覚える。茶色のテラコッタの屋根は、スペイン・アンダルシア地方の建物を連想させ、その一方で、建物の外部に庭を作らないというイスラム建築の特徴も見受けられ、イスラム風のタイルが散りばめられた玄関、壁に掛けられた色とりどりのフラワーポットが、青の風景にアクセントを加えている。

○群青（ぐんじょう）に染まる街並み秋の朝
○青尽くし坂の小路の朝の秋

酔宵子

青い幻想的なシャウエンを後に次はモロッコ第三の都市フェズに向かう。シャウエンから２００km。歴代のモロッコ・イスラム王朝の多くはフェズを首都に定めていて、首都が他の都市に移された時であっても、フェズはモロッコ人にとって特別な「心の都」であり続けている。

複雑な構造の旧市街地は将に迷路そのもので、１９８１年に世界遺産に登録された。これこそ、地元ガイドそれも迷路を熟知したガイドでなければ全く手の施しようもない究極の迷路都市である。狭い路地の為、流石に車は通っていないが、小型オートバイはひっきりなし、驢馬（ろば）の荷馬車は、糞を落としつつ堂々と大きな荷物を運んでいる。

○驢馬（ろば）通る
フェズの市場の秋の朝

酔宵子

【モロッコ・・・・は次回に続く】

こころ　コロコロ

高橋育郎

こころ　コロコロ　くるま　コロコロ
くるまは　にもつが　たくさん　つまって　コロコロ
こころって　どんないろ　こころって　どんなもの
なにがつまっているのか　みたことないよ

みたことないけど　ころがるものだろか
まるいたまかな　みがくとひかるかな
こころをころがそう　どんぐりみたいにころがそう
いびつじゃ　がたがた　まるくないところがらない

こころ　コロコロ　ころがって　コロコロ
どこまで　ころがるの　どこへでも　ころがるよ

こころ　コロコロ　ころがって　コロコロ
はずんで　はずんで　たかくたかく　とんでいく

こころは　とんでいく　ふうせんみたいに　とんでいく
かぜにふかれて　とりといっしょに　とんでいく
どこまでとんでいく　うちゅうのはてまで　とんでいく

おつきさまと　あそんでる
おほしさまと　あそんでる
おてんとうさまは　まぶしいよ
こころって　おもしろい
まるくて　ひかって
だいじな　だいじな　たからもの

絹の話（158）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

変わる風合い、感触、味

人間の歴史はたゆまない品種改良の歴史でもありました。蚕も究極の人口昆虫になり、農産物も同様な経緯を辿ってきました。物の風合いやうまさは年齢、性別、気候風土によっても大きく左右されます。

食品の工場生産

最近のお米も野菜も、乾物も、鮮魚も形は綺麗で見た目は美味しそうですが、どこか風味が抜けていないでしょうか。それに引き換え昔食べていた物には今日にない微妙なうまさを思い出させてくれます。太陽の光と風が「うまみ」を醸すのでしょう。私の親しい農家では自家用の米は昔ながらにハザに掛けて天日干しています。一味違います！自然のめぐみと農家の人に達に感謝の気持ちが自然に湧き上がって来ます。

浅草海苔、乾燥椎茸なども昨今は殆ど機械乾燥になって、色艶はよくても風味がありません。きのこ類も、ニンニクまでそうなって、「燻りがっこ」等も従来の農家の囲炉裏で燻された物は不衛生という事で販売禁止になってしまいました。

私の友人が養鶏している軍鶏は「鶏肉日本一」の賞を連続受賞しましたが、若い女性には肉が硬いと言って人気がありません。柔らかいブロイラーが好まれています。殆どの野菜は管理されたハウス等で作られていて、繊維質も各種ビタミン類も少なくなり、通年できるので「旬」と言う言葉は聞かなくなってきました。青臭いトマトやヘタの苦いキュウリなどはクレームのもとになります。苦さを消化出来て食味感の幅が広がり、大人の丈夫な体が形成されて行くのではないでしょうか。

周りを見渡すと、ウナギはもとより、ウニもフグも内陸産が増えて来て、年中同じ味の物が供給されています。それが今日の「安心安全」で、好ましい商品なのでしょうか。うまい物も時代とともに変わって行くのだと思われます。

私の食べたうまい物

三河湾の梶島のアサリ

アサリの好きな私はスパゲティー屋さんに入るとボンゴレを頼みます。スパゲテイーの上にのっているアサリ

がいつ採れて、砂地か砂利かどんな所に住んでいたかなど思いを巡らして食べるのが楽しみです。

アサリの最も美味しい季節は3月彼岸後～5月でしょう。それも砂地や泥地ではなく、砂と砂利と泥がバラッス良く混じっている所の物が美味しいです。アサリが砂利の下などに生息している小さなカニなどを食べるなどして、食性が多岐に渡るからでしょう。殻が黒くて盛り上がっています。砂地にいるアサリは殻が白っぽく、扁平で味も淡白です。またアサリは海水の濃度によって硬さ柔らかさが微妙に違います。

この条件を満たしているのが三河湾一色梶島のアサリです。豊川の植物プランクトンを擁した淡水が塩水と混じりながら湾中央でアサリに丁度良い濃度になり、日本一のアサリが育つのです。

残念ながらトヨタ自動車が田原に大工場を作り、大型輸送船を通すため、湾中央に深いシーレーンを掘削したので海流が変わり湾内の漁業は振るわなくなり、アサリの味にも影響しているようです。

トカラ列島口之島の野生牛

鹿児島県の屋久島から奄美大島につながるトカラ（吐噶喇）列島の北部の口之島に平安時代以前、南方か大和に連れて来ようとした牛が逃げて野生化したものが今日生息していて、島民が落とし穴などで捕獲して鹿児島に出荷していましたが、私の提案で、村長が列島祭りに自分達も食してみようと、手続きをして、会場の悪石島の祭り広場で、野生牛と一般牛（種類不明）の焼肉を食べ比べをしました。

うまい！噛み応えはあるが、なんとも言えぬ好ましい牛肉の香りが私を別世界の誘ってくれている様な気持ちになり、離島にいる事を忘れさせてくれました。

後日東京の赤坂で高級な牛ステーキをご馳走になりましたが、脂肪分が多く柔らかいが、香りがうすく野生牛には及ばないと感じました。

今日ではトカラ牛は超ブランド牛になっているそうです。

埼玉県上尾の蕎麦

三河育ちの私はソバを手打ちして食べる習慣がなく、味ではソバはうどんには及ばないと思っていました。ところがある日、上尾の私の知人の家のそば打ちに招かれ、何かと手伝いをしながらお昼2時の過ぎた頃出来上がり、馳走になりました。そばのかおりと歯ごたえのうまさに何とも言えぬ感動を覚えました。

「江上浩二の独り言」73

江　上　浩　二

瞼を閉じて（1）

ひろしは内緒にしていることがあったが、今日これから瞼を閉じ、少し思い出しながら打ち明けてみたい。

小学生の時近所に大きな農家の三男であった友人A君がいて、いわゆる小さい頃走り回ったり、遊び、結構皆で学校の帰りがけに宿題をさっと済ませて遊び、農家の納屋に入り込んで 町から引っ越して来たひろしにとっては珍しいだけでなく、触って動かすことに大いに興味を持った。

ひろしはいきなり、瞼を閉じた目の前に現れた時計は高校へ入学して数日後のクラスの様子をしてしていた。ひろしの通い始めた高校は学区の中の進学校で、クラスの席位置は自分の好きな場所でよく、日替わりをしない定位置ならよく、ひろしは前から2列目のある位置に決めて、座った。意外とその進学校は席の決め方は自由で、1列目を目がけて、それも中央の特等席には早くも柔道部に入部した、ある生徒が座っていた。入学したてで普通だと素性が分からない生徒だが、私も横浜方面来ているE君には覚えがあり、入学前の県内の中3の模試テストで常に上位に生徒であった。

ひろしは同じ1列目でE君の左側に座ってこれから定位置にしようとしている、メガネをかけた学ランの上の顔は色黒で陽に焼けた絶対にスポーツマンであろうB君に、後ろから声をかけて話を聞くとサッカー部だそうだ。ひろしは跳んだり走ったりすることが好きで陸上部に入部して、そういえばグランドの西側に2階建ての泥まみれ運動部の部室があり、サッカー部はひろしが入った陸上部の左隣であったことに気付いていた。ひろしがB君の第一印象として物静かで、決してガタイは大きくはないが、落ち着いて先輩のような話し方をする生徒だなとちょっと気になった。

さて、ひろしの入部した、サッカー部の右隣の陸上部で、後に全学で長距離走が1番となるC君がいた。ひろしはそのC君の稀有な人生の中でどれだけ近づくことが出来るのが、数年後になって少し不安な感じを持った。C君は小柄な方であるが極めて珍しい努力家で、冬の寒い中でも学ランの上着も着ずに夏の半そでシャツで過ごし、食するものは決して残さず、当時では珍しい学内のランチルームのソバ汁も飲み干す生徒であった。一度親御さんの仕事の関係で他県の進

学校へ転向したが、暫くして戻ってくるという連絡があったが、そう簡単には転入学は出来ず、公立の高校であるので、再度転入学試験をパスして、同窓となった。C君なども、ひろしと同じ町の他中学であったがその名前には覚えがあり、ひろしの友人F君の知り合いであった。

ひろしには、ほんのわずかな時だったが、瞼を下した間にこれだけのことが今風のバーチャルゴーグルをつけた如く蘇った。蘇ったというより、無意識の世界の中でスーッと輝いたようにも見えた。さて、ひろしも運よく希望の大学に入ることが出来、高1の同じクラスであったA君、B君、クラスは違うが同じクラブであったC君との若い世代としてのこれからの付き合いに希望と夢実現などの確固たる目標目的はないのだが、一人洋々とした気分になっていくのかなと想いつつ、さらに瞼を落とした。

同学年が４００人以上もいる進学校の生活から離れ、少し団塊の世代の後にあたり、大学闘争なども下火になってきた時代にひろしは大学に入って、社会の厳しい状況とそれらに関係した出来事に遭遇しなければならないなど、想定外のことが打ち寄せてきたのである。

高校の卒業式は当時、国立大学の入試日の前にあり、公式日程ではクラスの仲間は卒業式後には会う機会が無いのが普通で、同じクラブの仲間がひろしの家に集まったのは3月の20日過ぎで、国立大学の合否発表が終わってからで、ひろしとC君、に加え初めて登場するD君である。この3人は運よく現役で合格できた仲間で、3人は別々の大学に分かれるのだった。どちらかというと、これからはひろしをハブとして連絡しあっていくのであった。

ひろしは同じクラスだったA君とB君の消息（大学の合否結果）が気になったが、ひろしの近所の大農家の三男、A君は浪人する事になって都内の予備校に決まった。サッカー部のB君の消息はわからずじまいであった。

もうここまで時計の針が進むと、閉じた瞼は気にならなかった。というより、夢をみているのでもなく、過去が今の時間に登りつめたような事象みたいになった。こういう体験は初夢なのか、いやそうでない単なる昼間うたた寝をし始めた時にみる夢もどきの様なものなのか、ひろしはもう拘る必要もないと少し暖かい窓際にあるソファーで寝入った。

（次号へ続く）

初狩便り（26）

花野みぷり

初狩駅

私たちの田んぼと畑の最寄駅である初狩駅は、明治四十三年（一九一〇年）に開業した。今から百年以上も前、明治時代に駅を設置するにあたり、初狩村は大揺れだったらしい。駅ができると村の平和が乱れる、機関車の黒い煙が困るなど反対の人がいた上に、村は財政難だった。駅舎の位置や用地取得などの問題をかかえながらも、明治三十五年（一九〇二年）に停車場設置請願書を初狩村議会は決議し、逓信省へ請願した。下初狩宿・本陣の当主・奥脇愛五郎氏は、初狩停車場敷地代金の内、四百円を寄付し、初狩駅が設置された。開業当時の一日平均乗降客は六人、駅の年収は約八二八円だった。

時代が進み、昭和四十八年（一九七三年）には、駅の東にある甲州砕石会社の砕石輸送が盛んで、一日の平均乗降客は三千人、年収二億円にもなったという。

高度成長期が終わり、現在の一日の平均乗降客は三九三人、無人駅である。甲州街道の一番の難所、笹子峠近くのため、かつてはスイッチバックを行っていた。その遺構はいくつかあり、時代の流れを感じる。ここに駅を誘致してくれた先人に敬意を払い、有難いことと頭を下げたくなる。

（写真・資料提供　本陣跡・古民家　みどう本陣様）

（写真：矢野都紀子）

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
https://hondachiro.exblog.jp/

2023年11月22日
ぎっくり系の気配

朝晩が涼しく日中が暖かい
すごしやすいですが服装に困ります
外を歩いていると
ダウンジャケットなどの上着を着ている方と
半袖や薄手の方もいるなど
面白い状態になっています
もちろん単純に
寒いからニット帽やストールを着用し
厚着しているわけではなく
ファッションや行動時間帯によるものだと思います

天気予報では週末気温がグッと下がるそうです
ということは　ぎっくり系に要注意です
本田カイロで施術していると
患者さん自身は気づいていませんが
ぎっくり系の気配が出始めている方もいらっしゃいます
3S＋ゆたぽん＋ヨーグルト＋八分　を自宅で
年末に向けて身体
の流れをつけて
免疫力を上げて行
きましょう
今日も笑いながら
行きましょう

2023年11月27日

定期的に深呼吸

昨日は　寒かったですね
ただ　気温は低くても真冬の寒さに比べると
空気が冷えきった日々が続いてない為か
幾分か暖かく感じます
前回の　本田のひとり言　に書きましたが
首　肩　背中　のはりが強く出やすくなっています
もちろん　筋肉の問題は少なく
内臓の問題が主となっているのですが・・・
普段生活していると　スマホ　や　パソコン
などは背中を丸くして下を見ていることが多いと思います
集中しているとそんなきつい状態を続けています
これは　身体への負担は大きいですよね

そこで　腕を上にあげます
その時に　オーソドックスに
手を組み手のひらを返します（手のひらが上を向くようにする）
その状態で　胸を少し前に出します
これがきつい方は
手を組み手のひらを返さずやってみて下さい
このとき3S＋ゆたぽん＋ヨーグルト＋八分　の
深呼吸しながら　吸いながら準備　吐きながら手を上げる
勢いをつけず　ゆっくり動作をして下さい
気づいた時　固く感じる時に定期的にやってみて下さい
今日も笑いながら行きましょう

康鍼治療院（www.yasuhari.com）　玄　翁

「甲辰の歳」

令和六年　甲辰
六十年の循環の　四十一番目の歳まわり

「甲」は木の兄の陽の歳
十干最初のめぐりなり
春の日差しが　降り注ぎ
新たな生命や　物事が
種から発芽し　根を伸ばし
殻を破りて　動き出す
初芽のこの時　物事が
一気に成長　動き出す

「辰」は土用の　変化の歳
十二支　五番目　春の時
春の日差しが　降り注ぎ
光をいっぱい　受け止めて
草木は広がり　成長す

辰は龍にも　例えられ
万物振わせ　躍動し
姿形が整いて
活力　旺じて　上昇す

「甲」と「辰」の関係は
木の兄が　土を形にす
木は成長・発展を　促す働きそのもで
土の変化を形にし　新たな成長作り出す
木性・春気は　陽となりて
物事すべてが　照らされて
内も外も　映し出し
良くも悪くも　顕になる
表だった行いも　人目に付かぬ行いも
地道な　努力が認められ
未だ見ぬ内の　才能が
一気に成長・開花する

甲辰は　報いの歳
成長・変化が促される

「冬は養生の季節なり」

冬の寒さの季節なり
余計な活動　減るゆえに
気血を温存　できる時
四季の中でも　養生は
冬にするのが適っている

冬は陽気が少なくて
寒気が多くて　冷える時
適度に寒さを感じれば
寒気の作用で　皮膚閉じて
陽気を　内に留めおき
この時　気血が内臓を
温め・潤し　養うぞ
内側しっかり内燃すれば
体力・元気を取り戻す

冬の季節の一日は
朝は遅くて　夜早く
早く陽(ひ)が落ち　夜長く
外向け活動　減ることで
ゆったり・まったり　ほんわかし
睡眠時間が伸びる時
しっかり寝れれば　身体は
回復・修復・調整し
ゆっくり元気を取り戻す

冬は食欲増える季節(とき)
食が進みて　心身の
気血の栄養　補充する
季節の食材・料理には
気候に適った　栄養が
含まれ身体　欲してる
この季節(とき)太るの気にせずに
しっかり食べるが良い季節(とき)で
気血や精が充実すれば
一年元気に過ごせるぞ

冬は内側　養う時
季節の寒さの効用ぞ

打球の二麗人を吟ず　殿山木風

十月風無く　絶好の天
軽装の黄赤　緑の芝に鮮やかなり
打球遠く放ち　揚揚として歩く
成毀は誰か知らん　壮気然ゆ

吟打球二麗人

十月無風絶好天　輕装黄赤緑芝鮮
打球遠放揚揚歩　成毀誰知壯気然

（語釈）○打球…球を打つ。ゴルフ。　○揚揚…得意な様。　○成毀…うまくまとまることと、だめになること。
○壮気…盛んな意気。

（通釈）此の日（十月十七日・岳精会コンペ）は風もなく晴れて十月の絶好のゴルフ日和。黄色や赤の鮮やかなゴルフウエアが緑の芝に映えている。
参加した女性二人はドライバーで良く飛ばし意気揚々としてプレイを始めた。結果の成績は誰も知る由がないが意気軒昂、元気な若さで燃えていた。

※　九月十九日に横浜駅構内の階段で転んだ。不注意だ。事故後、明日はゴルフと言う時に病院で診てもらったら鎖骨を骨折していると解った。「明日ゴルフできますか?」と聞いたら相手にされなかった。主催者としてせめての思いで朝の挨拶に出て皆さんを激励した。小田原湯本ゴルフクラブは九月二十二日に継いで二度目だ。受付嬢が気の毒にと覚えていた。

主催者となると「雨男」と有難くないイメージを持っているが、二回とも天気が良い。
此の日は特に天高く空晴れ風もなく、本当に良い天気だった。皆さんせめて天気が良くてゴルフが楽しめる事だろうと胸をなで下ろした。大した責任者心得である。此の日は辞書持参で宿題を完成させようと決めていたが、この詩と共に拙い漢詩が二つ出来た。お陰で目はショボショボだが私も気分良かった。コンペの結果は驚いたことにベスグロを女性が取った。こんな体験は初めてだった。

爽やかな緑に似合う二麗人
鮮やかなゴルフウエアに秋の芝
華麗なり女心に秋の空　　**木風**

編集室だより【二〇二三年十一月】

今泉由利

○引馬野爾、仁保布榛原、入乱、衣爾保波勢、多鼻能知師爾

○引馬野ににほふはり原いりみだり衣匂はせ旅のしるしに

万葉集巻一にあり、二年壬寅太上天皇幸　時歌と前書があり、右一首長忌寸奥麻呂と名もでている。

時の太上天皇であらせられた持統天皇が、参河国へ御幸された時、従駕した臣下の人々の作歌の内の一首であり。

歌の意味は、「引馬野に色美しく咲いている萩の花原の中へ諸人いり乱れ、遊び興じて、旅の記念に」

引馬野は、愛知県宝飯郡御津町御馬であり、古くは、参河国穂ノ郡引馬郷であり、祖父母、父母、私、ここに生れ育ちました。

古来、参河国宝飯郡にある、宮路山は、紅葉の名所として、持統天皇が、参河国行幸の行在所となった所で、「参河図絵」などの古文書に皆記されている。参河国の国守であった、持統帝の王子、草壁王子を祀ってある。この山下は、東海道五十三次の一つ、御油であり、帝の行在所へ御燈火用の油を献上したという古事より、御油の名を得たと。この山裾をめぐり一条の清流あり、音羽川、宝飯郡の野を流れて、海にそそぐ所が御馬村であって、即ち引馬野。

持統天皇は、海近く御休憩され、従駕の大宮人、女官たちが、あたり一面の萩原に遊ぶ様。長忌寸奥麿の一首『引馬野ににほふ榛原入り乱り衣にほはせ旅のしるしに』

宮路山より、約三キロ下流の音羽川、海にそそぐ所、一橋架り、大老松あり、そのもとに古碑立ち「持統帝行在所跡」

昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会

が開かれました。

私の知る限りのより、父母の家の奥座敷で、地域のアララギ会員が集まり、歌会、編集会、新年会…「月刊短歌誌、三河アララギ」が発行されていました。

「おんぶ」をされてゐる頃より、短歌を作っていた。という父と、「何も知らないで嫁入りさせられて来た家に、沢山の文学書、短歌書があり「ホッとした」という母。

私は、ここに馴染んで育ち、ここより一番遠い所は行ってみよう…とアルゼンチンまで行ってみて、そこにも馴染み、親しんだけれど、自分には、色々な角度から理解出来る言葉「日本語の中に居たい」と思いついて、日本に帰ってきた。外国語を体験して、今、日本語に居て、良い人生だったと、しみじみ思う。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一五〇‐〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三‐四五‐三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ　090‐8434‐8646
TEL　03‐6765‐5838
◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行　今泉由利